◎聖徳大学　公認心理師入学説明会　模擬講義　　担当：大石武信

「感情・人格心理学Ⅱ（人格心理学)」　　令和４年１月 23 日（日）

☆人格とは？

◎Personality（人格）

⇒ギリシャ・ローマ時代の「仮面」ペルソナに由来。その劇の中で俳優が演じる役割を意味
⇒ある特徴をもった人
○ 「個人の内にあって，その個人に特徴的な行動や思考を決定する心理的物理的体系の力学的体制である(G．W．オルポート)」。
※日常での“人格”には道徳的・倫理的価値が含まれる。　ex.「あの人は人格者だ」
○心理学の定義上では価値的なものは含まない。
⇓
○日常で使用される「**人格**」と心理学で使用される「**人格**」にはニュアンスに誤解を招く可能性がある。

◎Character（性格）

⇒ギリシャ語で刻み込まれたもの
⇒標識，特性
○「個人における感情及び意志の比較的恒常的な反応総体」
・情意的あるいは意志的行動様式の特徴という面を強調する傾向⇒知能を含まない
・広義のパーソナリティの下位概念とみる立場もある。

◎Temperament（気質）

⇒個人の情緒的反応の特徴をいう
⇒刺激に対する感受性，反応の強度や速度に表れる。
○先天的に決定されやすい
ex. 「社交的」「わがまま」→性格
「のんびり」「せっかち」などの精神テンポ
・「興奮しやすい」「物静かだ」など個人特有の気分的気質
・気質の個体差は新生児から見られる。
⇓
○この特徴が成長後のパーソナリティのベースになるのではないか？
・気質を性格の下位構造と見る立場
・性格を意志の特質，気質を感情の特質とする立場

◎以上のように，心理学の専門家の中でもどの用語をどの定義で使用するかにはあいまいさがつきまとう。

◎本講義は,「**人格心理学**」というタイトルであるが，その理論の提唱者により，**人格・性格・気質・パーソナリティ**と様々な表現が混ざることになるのはこのためである。
◎講義中, 多くの表現では, パーソナリティという用語の使用頻度が高いが, 他の用語も出てくる。

⇓

◎そのあたりを含めて理解を進めていってもらいたいと思う。

☆感情(affect)とは？

◎心理学においては，感情に関する用語がいくつかある

○**情動(emotion)**→原因が明らかで，始まりと終わりがはっきりしており，しばしば生理的覚醒を伴うような強い感情のこと

○**ムード(mood)**→原因が必ずしも明らかではなく，比較的長期間持続するが，それほど強くない快―不快の感情状態

○ダマジオ(1994)の**ソマティック・マーカー説**
→対象の知覚によって脳を含めた身体に生じた生理的な反応が情動であり，そうした反応が脳によって知覚され意識される感情経験が**フィーリング**(feeling)である。

◎このように，様々な反応や状態を総称して感情と呼ぶ。
◎感情に関しては, そのパーソナリティの表現の１つとしてとらえて考える方が理解しやすいと思う。

☆パーソナリティへの影響要因

◆ 遺伝的要因と環境的要因

○ゴルトン（ダーウィンのいとこ）の家系的研究
⇒優れた才能をもつ家系を調べ一般人と比較→遺伝により規定
・ジューク家 9 代 2820 人の調査結果（犯罪者 171 人，アルコール中毒者 282 人，売春婦 277 人，自活不能者 366 人）
→特殊な才能や犯罪傾向を対象
→遺伝要因と環境要因の分離が困難

○1920 年代
・アメリカを主流とする**行動主義**的な考え方＋・**精神分析**における幼児体験の重視

⇓

環境要因を重要視

○1920 年代～1980 年代のミネソタツインズ研究（約 1000 組の一卵性双生児を 60 年間の縦断的研究）
⇒行動主義的経験の影響を裏付けるため
⇒パーソナリティだけでなく，興味，職業選択，配偶者選択などにおいても類似していた

⇓

遺伝的要因の再認識

☆パーソナリティ特性と遺伝要因

◎外向性

○Floderus-Myrhed et al.(1980)の 12777 組の双生児研究

・一卵性双生児　0.51

・二卵性双生児　0.21

○Martin & Jardine(1986)の 2903 組の双生児研究

・一卵性双生児　0.52

・二卵性双生児　0.17

⇒外向的か内向的かという向性には遺伝要因が絡んでいる。

⇒外向性に強く関係すると考えられる新奇性を好むドーパミン上遺伝子の配列タイプと関連があるのでは？（Benjamin, et al., 1996）

◎神経症傾向

○Floderus-Myrhed et al.(1980)の 12777 組の双生児研究

・一卵性双生児　0.50

・二卵性双生児　0.23

○Martin & Jardine(1986)の 2903 組の双生児研究

・一卵性双生児　0.50

・二卵性双生児　0.23

⇒神経症傾向には遺伝要因が絡んでいる。

⇒神経症傾向とセロトニントランスポーター遺伝子との間に関連があることが示唆されている（Lesch et al., 1996）。

※日本人には，不安傾向の強さと関連するとされるセロトニントランスポーター遺伝子の配列タイプを持つ人が多い。

※また，新奇性を求める傾向と関連するとされるドーパミン受容体遺伝子の配列を持つ人がほとんどいないこともわかっている。

⇓

◎慎重で対立を避ける日本的パーソナリティには遺伝的基盤があるのでは？（周防・石浦, 1999）

◎活動性

○双生児研究により，せっかちかのんびりかという心的活動性には遺伝が強く関与している（詫摩，1967）。

○新生児にすでに活動水準の高さの個人差があり，それが長期間に渡って持続することも示されている（トーマスほか　1972）。

⇒活動性には遺伝的要因が強く関与している。

◎以上のようにパーソナリティの遺伝的要因について様々な指摘がされてきた。

◎現時点で，かなり科学的に証明されているのは

○**セロトニントランスポーター（5HTT)**の配列と**神経症傾向**。

・配列パターンが ℓ/ℓ の組み合わせの人に比べて， s / s や s /ℓ の人は神経症傾向（不安やうつ傾向含む）が高い（エッセンシャル遺伝学より）。

◎21 歳から 26 歳のライフイベントにより，26 歳にうつになった人の割合。

⇒ s 配列の人は ℓ 配列の人に比べて大うつの経験者が多い。

⇒イベントのとらえ方に違いがあるせいでは

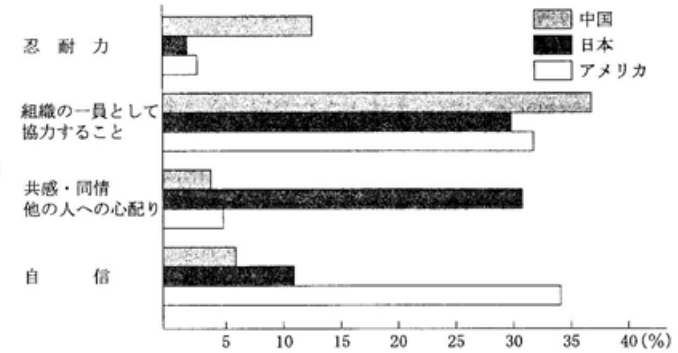
☆パーソナリティ形成の環境要因

◎従来，パーソナリティ形成の環境要因として，**親の養育態度**が研究されてきた

e. g. サイモンズ，P の受容的－拒否的，支配的－服従的の 2 軸で分類。

※親→子だけでなく，子→親の関係も考える必要がある。

◎親の養育態度には，このように発達していってほしいという発達期待が背後にある。



幼稚園・保育園で子どもが学ぶ最も大切なこと

(Tobin, Wu, & Davidson, 1989；古澤，1996)

◎幼稚園・保育園で子どもが学ぶ最も大切なことの日本・中国・アメリカの相違

○Rosenbaum, A., & O'Leary, K. D（1981）の研究

・配偶者に暴力をふるう夫には成育家庭で親の世代の夫婦間暴力を目撃したものが多い。

・その大半は親からの虐待を経験している。

⇒親の行動（攻撃行動をむき出しにする行動）や価値観（暴力肯定感）をモデリングしたのでは？

※この観点から行くと，現在のスマートホンをはじめとするネット社会における情報収集の影響は，パーソナリティ形成において無視することができない大きな要因となりうる。

☆パーソナリティ形成の主体的要因

◎パーソナリティ形成には，遺伝要因・環境要因という受動的なものだけではなく，自らの意志によって一定の方向に形成していくという，主体的・能動的なものもある。

○**フランクル. V. E**（実存分析の提唱者）

「人間には身体的，心理的および社会的側面に立ち向かう側面があり，それこそが人間を特徴づける能力である」

⇒パーソナリティを主体的に形成していく自由をもち，責任を持つ。

◎この主体的な自己形成の表れがアイデンティティの探求となる。

⇒現実自己と理想自己を比較

⇒そのギャップを意識

⇒自己嫌悪を感じる

⇒現実自己を理想自己に近づけようとする

⇒自己のアイデンティティを意識するようになり，行動に一貫性が出てくる

⇓

※主体的パーソナリティ形成といえるのでは？

☆**100 歳研究**（東京都長寿医療センター・慶応大学）

○都内に住む 100 歳以上の高齢者を対象にした研究。

○特徴として，

・心臓の機能が高いこと

・くよくよしないこと

の 2 点を指摘

⇓

○長寿には，身体的な面のみならず，精神的な柔軟性があり，社会的関係の構築ができることが重要。

第 1 回　公認心理師　国家試験

問 86 基本感情説における基本感情について、最も適切なものを 1 つ選べ。

① それぞれの感情が特異的な反応と結びついている。

② 大脳皮質を中心とする神経回路と結びついている。

③ 発達の過程を通して文化に固有のものとして獲得される。

④ 喜び、怒り及び悲しみといった感情概念の獲得に依存する。

⑤ 快–不快と覚醒–睡眠の二次元の感情空間によって定義される。

第 2 回　公認心理師　国家試験

問 79　基本感情のうちの怒りについて、適切なものを 1 つ選べ。

① 敵意帰属バイアスは，怒りの喚起を抑制する。

② パラノイド認知の性格傾向のある人は怒りを生じにくい。

③ 進化論の観点からは、怒りは自然淘汰上の有利さをもたらす。

④ 怒りの表情に対する認知については、異文化間での共通性はない。

⑤ タイプ C パーソナリティの人は怒りを含むネガティブ感情を表出しやすい。